



(ワイナリーに隣接するブドウ園)

ワイヘキ島は一年を通して暖かく、夜もそれほど気温が下がらないため、これらの品種の栽培に適しているとの事であった。一方で、品種によって気候など適した条件が異なるため、例えばソーヴィニヨンブランはマールボロ産が良いそうで、ここで栽培していない品種は取り寄せてブレンドするなどしている。まさに適地適作である。

ここでは13種類のワインが販売されており、敷地内のレストランで食事しながらそれらのワインを楽しむことが出来る。一次産業であるブドウの栽培(生産)、二次産業であるワインの醸造(加工)、三次産業である完成したワインの販売までを一貫して行う六次産業化を成し、ツアーを企画するなど町おこしにつながる観光農園を営んでいた。

#### <CABLE BAY VINEYARDS>

二軒目に訪れた CABLE BAY も同じくレストランを併設したワイナリーである。MUDBRICK 同様、見晴らしの良い丘の上にあり、ロケーションは抜群である。レストランもお洒落で、オープン直後には観光客とおぼしきお客さんですぐに満席となった。

ワイナリーでは販売されているワインについてだけでなく、ブドウ畑についても説明を受けた。航空写真に手書きで線を引き「ここはピノグリー、ここはシャルドネ、ここはメルロー」と、エリアを区切って複数の品種を栽培している。

加えて、野菜やオリーブの栽培も行っている。



(シャルドネ・メルロー・シラー・ピノグリなど複数のぶどう品種を栽培している)

#### <RANGIHOA ESTATE>

CABLE BAY を出た後、オリーブオイルの有名な RANGIHOA を訪れた。品評会で賞を取るなどとても有名なお店である。先ほどの CABLE BAY にもオリーブ畑があったが、ワイヘキ島はワインとならび、オリーブ栽培も盛んな島である。

RANGIHOA のオリーブオイルの特徴は、オリーブの実の完熟を待ち、収穫後 24 時間以内に製品に仕上げることで、上質なオリーブオイルを精製するため一切熱を入れない独自の製法で作られている。

現地ガイドも「ここでしか買えないから」とオリーブオイルを購入していたが、ワイン同様このオリーブを一つの目的にこの島を訪れる観光客も少なくないそうである。

土地の特産品を生かした六次産業化の成功例でもある。



(独自の製法で作られているオリーブオイルの特徴の説明を受ける)

<まとめ>

今回訪れたワイナリーやオリーブオイルのお店は、生産・加工・販売を一貫して行う六次産業化の成功例である。加えて、それらを目玉とし「町おこし」にも繋がる観光に結び付けている点は大いに参考にしたい。

近年、グリーン・ツーリズムやルーラル・ツーリズムという言葉をよく耳にするようになったが、本県においてはまだまだ伸びしろのある分野であると思う。ワイヘキ島は地理的条件、気候など、瀬戸内の島々と通じるところが散見されたことから、その思いを強くした。

地域の文化や伝統、オリジナリティを大切にして、他にないもの、その土地でしか見られないもの、体験できないものを提供することが出来れば、より一層の誘客に繋がるのではないだろうか。

【1月13日(土)】

① オークランド博物館(ニュージーランドの文化・歴史)

文責 帽子大輔



(公園オークランド・ドメインにあるオークランド博物館)

オークランド博物館はマオリと太平洋諸島の文化財では世界一の収蔵を誇る博物館であり、80ヘクタールを越す広大な公園オークランド・ドメインで、ひときわ目立つゴシック様式の建物であります。ここにはニュージーランドの歴史や近代の世界大戦の資料が保存をされておりますが、大変興味深いのは、ニュージーランドの先住民であるマオリの文化と歴史に関する資料が揃っており、学術的な資料価値が高いものも多くありました。マオリ人の先祖は、今から1000年前にハワイキと呼ばれるポリネシアの島からカヌーに乗ってやって来たことになっています。ニュージーランドに移動したマオリ族は、はじめに鳥や魚を捕ることを覚え、150年間、鳥や魚を主食とし生活をしていました。しかし、食料資源が減ったことと、15世紀の気候変化の影響により、鳥や魚を捕獲することが困難になったため、畑をはじめようになります。シダの根を探し、サツマイモやタロイモの畑を作り、夏場は魚を捕り燻製にして食すようになりました。気候変化により鳥の捕獲が困難になったマオリ族は、次第に厳しい冬を乗り切るため、貯蔵する知識も得るようになりました。しかし、16世紀にマオリ族に最大の危機が襲います。異常気象により、大量の雨と強風が森林や植物を破壊し、海岸の魚介類は打撃を受け、食料資源がさらに乏しくなりました。自給自足をし、鳥や魚を捕獲しながら生活していたマオリ族は、食を失い、洪水や強風から逃れるため、さらに内陸へ移動し、生活をするようになったとされています。



(マオリの歴史についての説明)

そして記録を辿っていくと1526年にスペイン人が船に乗って偶然ニュージーランドにたどり着いた記録があるそうです。そして、1769年には有名なキャプテン・クックがニュージーランドに滞在し、その後、多くのヨーロッパが、金、オットセイの毛皮、そして土地を求めて入植しましたが、主に土地の所有権をめぐる、マオリ人との衝突は深刻な問題となりました。そして、1840年にイギリス女王代理の総督とマオリの指導者46人との間にワイタングィ条約が締結され、以降ニュージーランドは事実上のイギリスの植民地となりました。この間もヨーロッパ人とマオリの争いは続きながらも、1995年にエリザベス女王が過去の争いに関して公式に謝罪し、マオリ人が失った財産や生命の保証を約束し、現在に至っています。



(数千年かけて移動してきた歴史を振り返る)

入場料は25ドル(ニュージーランドドル)ですが、オークランド在住者は無料で、市民の方も多く来場されていました。文化の違いもありますが、自国の歴史を無料で体感できる博物館が身近にあるのは大切なことでもあります。ラグビー場やサッカー場、そして池などの公園(オークランド・ドメイン)が隣接していることもあり、オークランド市のベンチマークであるこの丘は、市民をいつも見守っているのだろう。あらためて文化は明確な意思がなければ、保存され、次世代に継承されないことを考えると、急速な市町村合併により、予算の縮小をせざるを得ない各地の記録や伝承をどのように残していくのかを考えることも、今、目の前にある問題であると感じました。

## 1. 終わりに

文責 団長 明比昭治

今回の視察研修のテーマ別に、各議員から個別に分担した詳細の報告は前記の通りです。

それぞれの報告と重複することもあります。全体的な視点で私は旅の余談も含めて報告したいと思います。

まず、研修の初日は朝6時半で夜も明けきらない時間だがマイクロバスで出発、牛や羊や馬の放牧の光景を延々と眺めながら、途中の広場でホテルから持参した軽食をとり、「ゼスプリ社」の本部のあるタウランガに到着。

生産者団体のCEOから、ニュージーランド(ゼスプリ社)のキウイフルーツ栽培生産の歴史や、今後の方針など説明を受け、その後、生産現場の農場や、集荷・選果場(個人経営)で品質チェックや保管を行う「パッキングハウス」を見学。

この町ではここから外国への輸出を行う港湾設備も整備されていました。次にプタルルへ移動し、製造直売のチーズ工場で研修、さらに農業団体の事務所で、後継者育成などの取り組みを研修しました。

ニュージーランドは人口より家畜の方が多いと言われる酪農国であり、農業国であります。ここでの営農規模は、日本の農家の何倍もあります(キウイでは約6Haが平均とのこと)が、生産効率の向上や、品質確保の努力は自助努力が原則との生産者の姿勢が聞き取れ、良いものをつくれれば売れるとの自負の声も聞き取れた。TPPなどの貿易保護政策は、地方議会や政府と日常的に政治的つながりをもって施策に取り組んでいるので、日本の農家ほど深刻には受け止められていない。

2日目はいわゆるイギリス英語を学べると、日本からも多くの学生が留学しており、人気校の「ニュージーランド・ランゲージセンター・オークランド校」を訪問、ホームステイも学校が責任をもって斡旋して、学生が伸び伸びと楽しみながら学んでいる姿を確認できた。

次に、ニュージーランドでも国内にサイクリングロードの整備が取り組まれている(キャンプをしながら周遊する)のだが、そのプロジェクトの説明を受けた後、特にオークランドはヨットハーバーを含め、港の美しい市街地の風景があり、この周遊コースを自転車で巡る体験をした。また、愛媛のサイクリングロードの整備状況や、今年行われる「しまなみ海道」サイクリング世界大会

への案内もし、今後の交流の期待と要請も行った。

3日目は瀬戸内海の島々の活用が取り組まれているが、その見本ともいえるような取り組みのある、ワイヘキ島へフェリーで渡り、ブドウとワインの醸造販売・レストラン。オリーブオイルの製造販売、芸術作品の展示など、地域おこしの観光政策を見聞体験した。

何処にでもあるものを扱うのではなく、ここでは「これが他と比べても違うのだ」という差別化を目指し「ブランド」化を確立することが、定着と持続性のある取り組みへの最大の要因と思えた。

4日目に最後となったが、「オークランド博物館」を訪問、ニュージーランドの文化・歴史の資料を見ることが出来、太平洋の島々伝いに他民族の先人が融合しながら、移り住み原住民を形成した「マウリ族」と、一時イギリスの植民地として統治された時期もあったが、エリザベス女王の公式な謝罪により、融和が図られ平和が維持されている。

しかし、最近では中国資本やインド資本の進出で、地価も上がり、職も変化があるそうです。

農業が主産業の国故に、小さな政府を目指す必要性から、思い切った財政改革のため、鉄道の廃止や、郵政の民営化などを行い、日本でも参考事例と扱われたが、今日的課題としては環境保全のためにも車社会を見直す機運が高まり、地下鉄や鉄道の路線維持・計画にも取り組まれている。

これらの見聞を通じ、限られた時間の中ではあったが、我々とも共通する問題点・課題などの取り組みに、参加したメンバーそれぞれにもヒントも得ることが出来たものと確信する。この研修で得た貴重な体験と知識を、個々の議員活動も含め、これからの議会活動の中で、より良き県政推進のために生かすべく取り組んでまいります。

現地の通訳ガイドさん(ヨーコ)は、経験豊かで現地で結婚され家庭生活の中からも感じる現実も聞かせていただいた。またガイド兼運転手(イッセイ)さんも、大橋巨泉さんとも親交が深くあった方で、マスコミ情報や豊富な体験を持たれており、ともに詳しくニュージーランドの実態や国際交流の在り方など、示唆に富む話も聞くことができ、とても有益でした。

最後となりましたが、これら今回の旅行の成果を生むための企画や、手配のご協力戴いた皆さんにも感謝申し上げます。